

第23号

(通巻第67号)

平成29年12月

特別支援教育 ほっかいどう

Journal of Special Needs Education in HOKKAIDO



特集

北海道の特別支援教育の今

～特別支援教育の本格実施から11年目を迎えて～

北海道立特別支援教育センター

特別支援教育ほっかいどう（通巻第67号）

特 集

北海道の特別支援教育の今

～特別支援教育の本格実施から11年目を迎えて～

巻頭言

北海道の特別支援教育の今とこれから

北海道立特別支援教育センター所長 木 村 浩 紀

連載 1

（12月発行）

町との連携協定と模擬株式会社設立の取組

北海道今金高等養護学校 校長 高 嶋 利次郎

北海道今金高等養護学校 教諭 金 子 亘 喜

連載 2

（12月発行）

障がい者スポーツの期待の星～トップアスリートへのインタビュー～

北海道札幌あいの里高等支援学校 第2学年 伊 藤 友 里

連載 3

（1月発行）

職業学科を設置する知的障がい特別支援学校高等部における特色ある取組

北海道新得高等支援学校 教諭 平 田 昌 也

北海道釧路鶴野支援学校 教諭 松 田 久 恵

連載 4

（2月発行）

北海道の特別支援学校のスポーツ活動を支える

一般財団法人小野寺眞悟障がい者スポーツ振興会

理事長 小野寺 眞 悟

連載 5

（2月発行予定）

就労支援から見る自立と社会参加に向けた取組（仮）

社会福祉法人北海道リハビリター

連載 6

（3月発行予定）

地域における多様な教育ニーズに応じた市町村の取組（仮）

詳細については調整中

連載 7

（4月発行予定）

在宅就労における特別支援学校の取組（仮）

北海道八雲養護学校 教諭 塩 本 岳 彦

「北海道の特別支援教育の今とこれから」

北海道立特別支援教育センター

所長 木 村 浩 紀

1 はじめに

特別支援教育がスタートして11年目となり、また、学習指導要領が改訂されるなど、日本の教育において、特別支援教育は大きな転換期を迎えております。北海道においても、新たな「北海道総合教育大綱」が10月に策定され、来年4月から施行されます。また、新しい「特別支援教育に関する基本方針」についても同様に施行される予定です。

「特別支援教育ほっかいどう第23号」では、「北海道総合教育大綱」の基本方針で示されている「北海道に思いを寄せる（ふるさと北海道への愛を育む）」、「社会で自立し共に支え合う（力強く生き抜き力を育む）（子どもの学びの環境を整える）」、「未来を切り拓く（社会で活躍し続けられる人を育む）（北の大地で輝き続ける人を育む）」から、「社会参加・貢献を目指した取組」、「地域の支援体制の充実に向けた取組」、「障がい者スポーツを通じた取組」の3つの視点でまとめ、いくつかの事例を紹介することで、北海道の特別支援教育が取り組んできた成果と今後の展望について検討することとしております。

2 今後の展開

これからの時代は、A I（人工知能）が発達し、多くの職業に変化を及ぼすと言われています。

また、ここ数年の様子を見ると、人手不足による人材確保はどの業界にとっても大きな課題です。そのような中、私は障がい者が、そのよさや持てる力を生かし、地域で活躍することについても大いに期待したいと考えています。私が講演等で出向いた地域でも、すでにいろいろな取組がされていて、特別支援教育を受けてきた子どもたちが大人になって生き生きと活躍している様子を伺うことができました。

「社会参加・貢献を目指した取組」では、自宅勤務（テレワーク）による仕事の様子を直接拝見したり、当事者から具体的な内容や方法について伺ったりすることができました。I C Tを活用し、全国の仲間と仕事をしている様子は、障がいの有無にかかわらず、グローバルな時代を生きていく姿を象徴しており、今後の可能性を感じることができました。

「地域の支援体制の充実に向けた取組」では、教育委員会が保健福祉部等と連携して、最適な学びの環境を整える努力をしている取組を伺うことができました。誰かが強いリーダーシップをもって動かすことで、短い期間でもつながりができ、担当者が代わっても次へのステップに進むことができると感じることができました。また、特別支援学校と町が連携して、障がい者が地域で活躍する取組についても伺うことができました。就労支援や通年雇用、住宅環境の整備、作業学習、現場実習などについて連携協定を結び、実習や卒業後の就労支援にも積極的に取り組んでいる様子は、特別支援教育の域を超え、これからの町づくりや地域の在り方を考えさせられました。

「障がい者スポーツを通じた取組」では、障がい者スポーツアスリート御本人へのインタビュー談話や、サッカーなどの大会を通して、全道の特別支援学校の生徒が活躍する取組を紹介する予定です。障がい者を大切に、生き生きと輝く場面をつくらうとする取組から、共生社会の実現に向けた熱い思いを感じました。

結びになりますが、広域な北海道の特別支援教育の一層の充実に向け、参考となる事例を紹介することで、私たち自身が自分のこととして、それぞれの地域で何ができるかを考えていく一助になれば幸いです。当センターとしても皆様方の御示唆を頂きながら、北海道のために様々な活動を展開してまいりますので、今後ともよろしくお願いいたします。



町との連携協定と模擬株式会社設立の取組

北海道今金高等養護学校 校長 高 嶋 利次郎
教諭 金 子 亘 喜



1 はじめに

学校側の「卒業生の今金町内のユニバーサル農業への就労促進」という願いと、今金町商工会の「町の基幹産業の農業と商工業のワークシェアによる通年雇用、新産業創出・定住人口の増加」を図りたいという願いから、平成26年度に今金町商工会が「小規模事業者地域力活用新事業全国展開支援事業調査研究事業」の補助金を得て、「『にぎわい！今金』コミュニティビジネス創出による地域力再生プロジェクト事業」（以下「商工会事業」）を開始することになりました。

本事業の構成団体は、今金町商工会、今金町、JA今金町、北海道今金高等養護学校、社会福祉法人光の里です。その後、TTNコーポレーション、（株）TAISHIが加わりました。そして、今金町は、平成27年7月に今金町商工会、TTNコーポレーションと連携協定を結んで取組を推進し、12月には「今金町まち・ひと・しごと創生 人口ビジョン及び総合戦略」を策定し、その基本戦略の基本目標のトップに「障がい者が地域産業の担い手としての活躍の場づくり」を掲げ、障がい者雇用の推進に本格的に取り組んでいます。

2 特別支援学校卒業生の就労支援及び自立支援に関する連携協定

商工会事業を進める中で、関係機関の連携や調整がより効果的に行え、継続した連携と支援がスムーズに行われる関係機関相互の「関係性」に社会的な枠組みを付与しようとする気運が、平成27年度から関係機関の間で高まり、今金町では本校の生徒の実習や卒業生の就労支援、自立支援にかかわって、本校と連携協定を結ぶ方針を決定し、平成28年10月4日（火）に調印式が今金町役場で行われました。

調印式には外崎秀人町長と本校校長が出席しました。協定締結に先立ち、中島光弘副町長から経過及び主旨について報告がなされた後、町当局幹部職員と本校教頭が見守る中、外崎町長と本校校長が署名し、協定書が交わされました。連携協定の目的は、今金町の特別支援学校高等部生徒の就労に関する専門的な知識及び技能の向上を図るとともに、就労支援並びに自立支援に向けて包括的な支援体制を整えることです。

協定書では、6項目の事項について連携協力することとしています（表1）。

本校では、連携協定に基づき、実習や就労、生活自立等に関する課題を検討する場として、平成29年度から本校学校評議員会が「今金町キャリア教育・職業教育研究フォーラム」を兼ねることとしました。

表1 協定事項

- | |
|---------------------------------------|
| (1) 作業学習及び現場実習に関すること |
| (2) 校内作業学習等における教員及び生徒への技術指導及び助言に関すること |
| (3) 就労支援及び通年雇用に関すること |
| (4) 居住環境の整備に関すること |
| (5) 雇用と生活の自立に向けた支援に関すること |
| (6) その他相互に連携協力することが必要と認められる事項 |

<連載1> 町との連携協定と模擬株式会社設立の取組

学校評議員は、大学教授、今金町議会議員（障がい者雇用事業者）、今金町総務財政課長、今金町商工会事務局長、TTNコーポレーション取締役、道南地区農協青年部協議会理事、陶芸作家で構成され、在校生と卒業生の実習や作業に関する課題と解決策の検討に取り組んでいます。



写真1 連携協定調印式

3 模擬株式会社 IMAKANE FACTORY～社会に開かれた教育課程～

本校は、窯業科・産業科、農業科、家庭総合科・生活家庭科の5学科を開設し、学校教育目標を達成するため、生徒の実態に応じて作成した「今養版キャリアプランニング・マトリックス」に基づいて教育課程を編成し、「キャリア教育」と「社会に開かれた教育課程」の充実に努め、「共学共に学ぶ 共創共に創造する 共生共に生きる」の3つの視点から、生涯にわたるキャリア発達を目指した「キャリアアップハイスクール」の実現に向け、地域に根差した学校教育の創造に取り組んでいます。

特に、産業構造の変化や生徒の障がいの多様化、就労先が流通・サービス業に広がるなどの変化を踏まえ、生徒に育成すべき力として、主体的に業務遂行上の課題を発見し改善する能力、消費者ニーズに応じた商品開発力、組織が目指す目標に向かって努力し貢献する能力や態度を育て、職業生活への円滑な移行を推進する必要があると考えています。

そこで、平成29年4月のPTA総会において、「模擬株式会社 IMAKANE FACTORY」の設立を決定し、生徒全員が一人500円の出資金をPTAから受けて模擬株主及び社員となりました。代表取締役社長はPTA会長であり、総務部、営業部、生産部の3部体制で、営業部と生産部には、各学科の2・3年生から班長が1名ずつ選出されて所属しています。

【第1回学科全体交流会（模擬株式会社 IMAKANE FACTORY 総会）】

平成29年6月7日（水）に「第1回学科全体交流会」兼「模擬株式会社 IMAKANE FACTORY 総会」を行いました。

営業部長の教務主任から、株式会社の定款や組織、年間の学習計画の説明がありました。窯業科・産業科、農業科、生活家庭科・家庭総合科の代表生徒が、学科の年間の生産計画と販売計画を発表し、専門家（陶芸家）の



写真3 窯業科・産業科の取組の説明

指導を受けながら製品生産の工夫をすることや、北海道八雲高等学校総合ビジネス科と「ショコラクッキー」の味とパッケージを共同開発することなどが報告され、承認されました。窯業科・産業科では、陶芸の専門家（窯業アドバイザー）から学校祭で販売する商品の絵付けの方法を学んでいること、農業科では農家（農業アドバイザー）から指導を受けることが紹介されました。



写真2 模擬株式会社設立総会

【模擬株式会社 IMAKANE FACTORY の成果】

職業学科の生産、商品開発、商品管理、販売、受注作業を模擬株式会社で行うことで、会社の仕事という意識の下、消費者ニーズを考えて生産、商品開発等に意欲的に取り組み、次のとおりより深い知識や技術を習得して質の高い製品や商品開発ができるようになりました。

○ 専門教科の学習（自学科作業、他学科作業）～共に創造する

- ・ 模擬株式会社における窯業製品の生産の工夫（協同学習）

NHK室蘭放送局内のカフェや町内にある飲食店から、キーマカレー用の楕円皿や大皿の生産を受

＜連載 1＞町との連携協定と模擬株式会社設立の取組

注しました。受注品の生産方法を協同学習の方法で話し合うとともに、作業の目的や作業グループ、作業担当者の氏名、作業分担、作業の流れなどを分かりやすく示した「組織図」を活用しながら、各担当者を決めたり、報告する際の連絡系統を話し合ったりして、製品の生産を進めました。

また、「個々に与えられた責任を果たすことで全体の仕事が成り立っていること」、「自分の仕事が終わったら周りのために動くこと」という協働の考え方が身につくよう取組を進めました。

その結果、「生徒の生産に対する考え方が変化し、お客様のことを考えた上で、組織の中での自分の役割を考えて行動できるようになった」、「高品質な製品を生産できるよう、より深い知識や技術を意欲的に習得するようになった」、「障がいの自己理解が深まり、自己の長所を生かし、責任ある業務遂行を意識できるようになった」などの生徒の変容が見られました。

・ 専門家（陶芸作家）の指導・助言による新製品開発（地域学校協働活動）

陶芸作家である石川久美子氏（学校評議員）に指導を受け、流行を取り入れながら、全ての生徒が絵付けに取り組むことができる新製品づくりに取り組みました。製作場面では、協同学習の方法を用いて、1枚の皿の作業工程をどのようにするか話し合い、「同じチーム内（3人1チーム）でも、細かな作業が難しい生徒はマスキングテープを貼る」、「細かな作業が得意な生徒は筆を使う」、「慣れてきたら役割を交代する」など、生産工程を工夫し、生産の効率化を図りました。

・ 高特福連携による商品開発～交流及び共同学習（地域学校協働活動）

本校家庭総合科が、北海道八雲高等学校総合ビジネス科及び卒業生の就労先でもある「多機能型事業所ワークショップいまかね」と共同で、地域の定番土産商品となるよう「ショコラクッキー」の開発を行いました。本製品は、北海道高等学校商業教育フェアや本校学校祭で販売するため、両校が「合同商品企画会議」を開催し、それぞれの購買層を考慮し、3種類の味の組み合わせやパッケージデザイン、商品名（「チョコっと ひといき」）を検討しました。9月に行われた北海道高等学校商業教育フェアにおいて、本校家庭総合科1年生2名は、北海道八雲高等学校総合ビジネス科2年生とともに、2日間で120個以上販売することができました。北海道八雲高等学校の生徒との共同商品開発を通して、本校の生徒はプレゼン力や話し合う力を高めることができました。

○ 共通教科（職業・家庭）の学習（地域学校協働活動）～共に創造する

生徒の進路動向とリンクさせ、共通教科の学習を学科共通の作業学習（環境整備、流通・サービス、食品加工）として実施しています（デュアル実習Ⅰ）。毎月1～2回程度、役場での町内会配布物の仕分けや総合福祉施設での車いす清掃、高齢者デイサービスのレクの補助などを行っています。

この活動により、関係機関の職員の業務量が軽減され、職員や利用者から感謝の言葉をいただくことで、自己有用感の向上及びサービス業務等のスキルアップにつながっています。

○ 「地域グループワーク」の学習（地域学校協働活動）～共に生きる

地域の商工会等の関係団体が主催する7つのイベントの企画・運営に本校生徒が参加し、イベントスタッフの一員として、業務を補助する活動に取り組んでいます。生徒は地域の一員としての自覚が深まり、町民から感謝され、期待されるようになり、様々なイベントへの協力要請も増加しています。



模擬株式会社ロゴマーク

このように、本校では、町との連携協定に基づいて地域の専門家や関係機関と連携した地域学校協働活動の推進を図り、協同学習を通して、製品の質の向上と新製品の開発・販売を行い、地方創生と共生社会の担い手となる人材の育成に努めています。

「北海道今金高等養護学校Webページ」→ <http://www.imayou.hokkaido-c.ed.jp>



障がい者スポーツの期待の星～トップアスリートへのインタビュー～

北海道札幌あいの里高等支援学校 第2学年 伊藤 友里

1 はじめに

「スペシャルオリンピックス冬季世界大会・オーストリア」フィギュアスケート競技 日本代表選手 伊藤 友里さんの紹介をします。

伊藤さんは、平成29年3月にオーストリアで開かれた知的障がい者の国際スポーツ競技会「スペシャルオリンピックス冬季世界大会・オーストリア」のフィギュアスケート競技に出場し、見事、銅メダルに輝きました。今回、伊藤さんが在籍している北海道札幌あいの里高等支援学校に訪問し、インタビューを行いましたので、その様子を紹介します。

2 トップアスリートへのインタビュー

所 員：はじめまして。伊藤さん、どうぞよろしくお願いします。

伊藤さん：こんにちは。よろしくお願いします。

所 員：初めに、御自身や学校での学習のことを聞かせてください。

伊藤さんの出身地はどこですか。

伊藤さん：札幌生まれです。その後、帯広に引っ越しをして、小学校2年生のときに札幌に戻ってきました。

所 員：学校で好きな教科は何ですか。

伊藤さん：作業学習が好きです。特に、焼き菓子やパンづくり、縫工が好きです。先日の学校祭でも、くるみパンやレーズンパンなどを販売しました。

所 員：パンづくりで、難しいことは何ですか。

伊藤さん：形を整えることが難しいです。でも、学校祭のときに、お客

さんが喜んで買ってくれたので、とても嬉しかったです。

所 員：家でお菓子をつくったことはありますか。

伊藤さん：一度、パウンドケーキをつくりました。おいしかったです。

所 員：今、学校で一番楽しいことは何ですか。

伊藤さん：英語です。学校で習うときの教科は「グローバルコミュニケーション」(*注)と言います。週1回、授業があります。スペシャルオリンピックスでオーストリアに行ったとき、英語で会話をしたので、今後のためにも勉強したいです。英語のほかにも、ドイツ語を勉強して、「おはようございます」、「ありがとうございます」、「おやすみなさい」が話せるようになりました。

(*注) グローバルコミュニケーション：本校で行われる、主に外国語と情報の教科を合わせた指導の形態の名称です。国際社会や情報社会に対応できる基礎的な力を育てることを目的に、タブレット等の情報機器を活用したり、ALTによる学習を行ったりと、国際文化・情報処理に関することを実践的に学んでいます。



写真1 北海道札幌あいの里高等支援学校

<連載2>障がい者スポーツの期待の星～トップアスリートへのインタビュー～

所 員：それでは、フィギュアスケートの話題に入りたいと思います。フィギュアスケートはいつ頃から始めましたか。

伊藤さん：フィギュアスケートは、帯広にいるとき、3歳から始めました。フィギュアスケートを始めたきっかけは、テレビでフィギュアスケートの特集をしているのを偶然に見て、「自分からやってみたい」とお母さんに言ったみたいです。

所 員：帯広でフィギュアスケートを始めたとき、誰かに教えてもらったのですか。

伊藤さん：はい。帯広のクラブでフィギュアスケートを始めたのですが、とてもよい先生に出会うことができました。帯広では、小学校1年生のときに大会に出ました。今年でフィギュアスケートを始めて14年目になります。

所 員：今、練習はどのくらいしていますか。

伊藤さん：月5回程度、練習をしています。時間は1時間半ぐらいです。練習はすごく楽しいです。

所 員：スピンが得意と聞きましたが、いつ頃からできるようになりましたか。

伊藤さん：5歳頃からできるようになりました。スピンができるようになるためには、基礎をしっかりと固める必要があります。基礎づくりは帯広のときの先生が教えてくれました。また、元全日本フィギュアスケート選手の杉田秀男先生が、「友里はスピンが得意なので、大会では、演技にスピンを取り入れることで、高得点を取ることができる」とアドバイスをしてくれました。そのおかげで本番では3位に入ることができました。

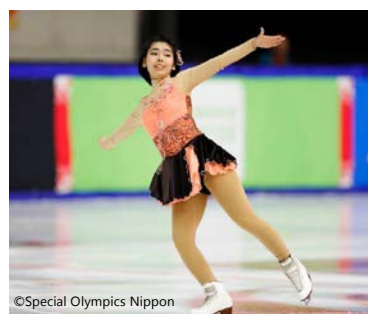


写真2 大会時の演技

所 員：銅メダル獲得おめでとうございます。銅メダルを獲得したときの感想を聞かせてください。

(写真提供：スペシャルオリンピックス日本)

伊藤さん：すごく嬉しかったです。世界大会で私のカテゴリーには7人の選手が出場していました。カナダやイギリス、デンマークなど、世界各国から出場していました。アジアからは、私一人でした。

所 員：予選通過時は何位だったのですか。

伊藤さん：予選は6位でした。そこから逆転して3位に入ることができました。予選でミスがなかったら、2位に入れていたかもしれません。

所 員：伊藤さん自身は、3位という結果をどのように感じましたか。

伊藤さん：金メダルは難しいかもしれないと思っていました。銀メダルか銅メダルを取ることができればいいなあと思っていましたので、大会前の目標を達成することができました。

所 員：世界大会の銅メダルを取ったときはどのような気持ちでしたか。

伊藤さん：とても嬉しかったです。メダルは重かったです。

所 員：スペシャルオリンピックスの予選大会は、どのように行われますか。

伊藤さん：ナショナルゲーム（全国大会）が予選を兼ねていて、金メダルを取ることが世界大会につながります。新潟で行われた全国大会で金メダルを取ったので、スペシャルオリンピックス世界大会に参加することができました。

所 員：スペシャルオリンピックスは、オーストリアで行われたと聞きましたが、街の様子を見たり、おいしいものを食べたりする時間はありましたか。

伊藤さん：最初、ウィーンに2泊してからグラーツに行きましたが、ウィーンでは、見た目も味も「なんだろうこれ？」と思う食べ物がいっぱいありました。チーズとかパンは、すごくお

＜連載2＞障がい者スポーツの期待の星～トップアスリートへのインタビュー～

いしかったです。

所 員：衣装は、どのように用意しているのですか。

伊藤さん：衣装は、お母さんの手づくりです。

所 員：フリーの演技の時間は何分ですか。

伊藤さん：演技の時間は2分間です。2分間続けて演技するのは、体力面で大変です。次からは大会のレベルが上がり、2分30秒に演技の時間が伸びるので、もう30秒続けられる体力をつけるのがこれからの課題です。

所 員：今までスケートをずっと続けてきて、よかったと思うことはありますか。

伊藤さん：世界大会や日本大会に出られたことです。スペシャルオリンピックスのことができたことがよいきっかけになりました。小学生のときに、スケートの先生が替わり、演技で厳しく注意されたことがあって、「辞めたい」という気持ちになったときもありました。今日まで、お母さんに励まされながら続けてきましたが、辞めずに続けてきたことで、銅メダルを取ることができたので、続けてきてよかったと思いました。

所 員：次の大会の予定を教えてください。

伊藤さん：2020年、東京オリンピックの年に大会があります。開催地は分かりませんが、日本で大会があります。日本での大会なので、3年後のこの大会に出場することを目標にしています。今から、どんなライバルが出てくるのか気になります。

所 員：フィギュアスケートについて、これからどのようなことに挑戦してみたいですか。

伊藤さん：3回転ジャンプができるようになりたいです。今はシングル（1回転）なので、これから、2回転、3回転と挑戦していきたいです。フィギュアの選手では、宇野昌磨選手や武田奈也さんが好きです。宇野選手は顔が可愛いので好きです。去年は、安藤美姫さんのアイスショーを見に行きました。

所 員：将来、どのような職業に就きたいかなど、伊藤さんの夢を教えてください。

伊藤さん：将来は、お菓子をつくる仕事をしている作業所などで働きたいです。

所 員：最後に、伊藤さんにとってスケートとはどのようなものですか。

伊藤さん：自分の中で、『自信をもってできるスポーツ』だと思っています。

所 員：以上でインタビューを終わります。どうもありがとうございました。

伊藤さん：ありがとうございました。これからもよろしくお願いします！

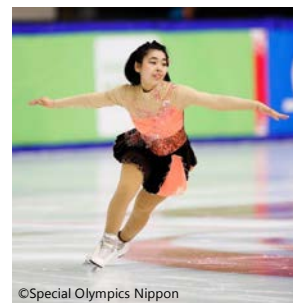


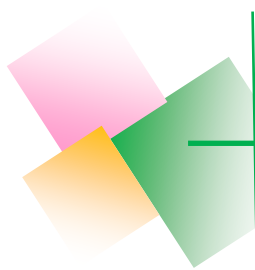
写真3 大会時の演技
(写真提供：スペシャルオリンピックス日本)



写真4 インタビューを終えて
(学校にて撮影)

「北海道札幌あいの里高等支援学校Webページ」

→ <http://www.ainosatokoshi.hokkaido-c.ed.jp>



新得町との連携事業「さくらプロジェクト」の取組 ～地域協働型・社会貢献型の作業学習を目指して～

北海道新得高等支援学校教諭 平 田 昌 也

1 はじめに

北海道新得高等支援学校は、十勝の北西部に位置する新得町に設立された知的障がいの生徒を対象とする特別支援学校高等部単置校で、木工科、家庭総合科の2学科を設置しています。平成28年度に開校し、今年で2年目を迎えます。

新得町は、豊かな自然や農業、酪農、リゾート施設、福祉施設などの豊富な地域資源に恵まれた町です。本校はその新得町とともに歩むべく、「豊かな自然の中で 豊かな地域資源を生かし 豊かな『生きる力』を育てる」を教育理念とし、「自ら学び 共に高め 豊かな『生きる力』を育てる」を学校教育目標に掲げています。

地域資源を活用した教育活動としては、社会貢献を目的とした作業学習（さくらプロジェクト）の他に、週1回、町内の公共施設やリゾート施設などの事業所で実習を行う「校外作業学習」に取り組んでいます。

2 さくらプロジェクトとは

本校は開校に向けて、社会貢献や地域資源を活用した教育活動など、学校運営にかかわる準備を新得町とともに進めてきました。そして、新得町や町内の事業所、企業、関係機関等と学校が連携して、本校生徒の職業自立や社会自立、社会参加の実現に取り組む「新得高等支援学校協力会」を設立しました。「さくらプロジェクト」とは、この「新得高等支援学校協力会」と共同で行う社会貢献事業であり、新得町内の小学校への新入学児童に、本校で製作した記念品を贈る取組です。新得高等支援学校協力会からは、製品製作にかかわる原材料費を提供していただいています。

作業学習の目的は、働く意欲や姿勢など将来の職業自立及び社会自立に必要な基礎・基本の習得を目指していますが、「さくらプロジェクト」は、その中でも働く意義の理解や主体的に働く力の習得に重点を置いています。新得町から製品の受注を受け、製品を製造し、入学記念品として新入学児童に製品を直接手渡す活動を通して、第三者から与えられた役割を果たす責任感を自覚し、製作した製品を必要とする人や手にして喜ぶ人々とのつながりから、「他者から認められた」、「自分も人のために役に立つことができる」という自己有用感及び自己肯定感をもちたせることがねらいです。

3 製品（記念品）について

製作する製品は、小学生が成長しても使用できるよう、木工科は踏み台にもなるスツール（背もたれのない椅子）、家庭総合科はスツール用のクッションとしました。そして、製品への所有感を高めてもらうために、それぞれの製品一つ一つにレーザー加工機や刺繍ミシンを使って児童の名前を入れました。

＜連載3＞職業学科を設置する知的障がい特別支援学校高等部における特色ある取組



写真1 スツールとクッション



写真2 レーザー加工機による
名前入れ



写真3 刺繍ミシンを使った
名前入れ

4 さくらプロジェクトの活動内容

新得町から生徒が地域で活動するための環境として、製品の受注、製造、納品など、製造から流通までを含む一連の工程を通した学習活動を行う場所を提供していただいています。

「製品の受注」は、新得町より製品製作の依頼を受けるもので、本校生徒が新得町役場を訪ね、新得町長から直々に製品の注文を承りました。町長からさくらプロジェクトの目的についてお話をいただき、「新入学児童へ心をこめて製作してほしい」との言葉とともに注文書が生徒へ渡されました。



写真4 新得町役場訪問



写真5 注文書による受注



写真6 町長へ製品サンプルを納品

「製品の製造」は、作業学習（週6～7単位時間）の時間の中で、約60個の製品を1年間かけて製作します。ここでは、「さくらプロジェクト」のねらいとともに、生徒個々の課題克服に取り組み、職業自立や社会自立の実現に向けて作業に励みます。作業の進め方は、年度当初に学んだ基礎的・基本的な知識や技術を基に、自分で調べたり、仲間と相談したりするなど、生徒が主体となって取り組む学習を展開しました。また、「家庭科」の授業で行われた保育所訪問を通して、自分たちが製作した製品を贈る子どもたちの様子を事前に知ることができました。



写真7 作業学習の様子



写真8 パソコンを使って、レー
ザー加工機を操作する様子



写真9 生徒が主体的に作業に
取り組む様子

＜連載3＞職業学科を設置する知的障がい特別支援学校高等部における特色ある取組

「納品」となる贈呈式は、4月中旬に新得町内の小学校（3校）を訪ね、行いました。生徒が主体となって、それぞれの小学校で行う贈呈式の進行等を行い、新入学児童に一人ずつ記念品を手渡しました。この場面が、生徒にとって、1年間頑張ってきた努力が報われる瞬間となるものです。生徒たちは、自分たちが製作した製品を手にする児童を見て、「喜んでもらえてよかった」と感想を述べていました。



写真10 記念品を受け取った新入学児童との記念撮影
(富村牛小学校)



写真11 贈呈式の進行の様子
(屈足南小学校)



写真12 新入学児童一人一人への記念品の贈呈
(新得小学校)

5 おわりに

本校は、さくらプロジェクトの他にも、レーザー加工機によるネームプレートの受注販売など、新得町とかかわりをもちながら作業学習に取り組んでいます。このような地域資源を活用した学習を積極的に取り入れていくことで、地域の方々に本校の取組や特別支援教育に関する理解を深めていただき、共生社会の形成に向けた取組を推進していきたいと考えています。

「北海道新得高等支援学校Webページ」

→ <http://www.shintoku2016.hokkaido-c.ed.jp/>



環境・流通サポート科における地域人材、地域資源を活用した作業学習の実践

北海道釧路鶴野支援学校教諭 松田 久恵

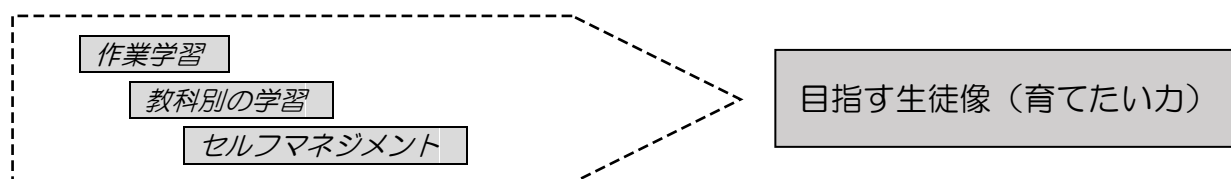
1 はじめに

本校は、平成26年度4月に開校し、4年目を迎えました。聴覚障がい教育部門（幼稚部、小学部、中学部）と知的障がい教育部門（職業学科を設置する高等部）を併設する、道内で唯一の特別支援学校です。知的障がい教育部門の高等部では、近年の産業構造の変化や職業学科における進路先の動向を踏まえ、「環境・流通サポート科」、「福祉サービス科」、「生活技術科」の3つの職業学科を設置しています。

＊今年度から「生活技術科」は募集を停止し、「生産技術科」が新設されました。

2 高等部の教育の特色

本校高等部では、「学校教育目標」、「目指す生徒像（育てたい力）」を実現させるため、3つの柱（「職業学科における作業学習」、「教科別の学習」、「セルフマネジメント」）を特色として教育を推進しています。働き続け、地域社会で自立した生活を送るために必要な知識や技能を育てること、様々な経験を通して、自己有用感を高め、自己理解、自己選択、自己決定できる力を培うことなどを目標として掲げ、教育課程を編成しています。



(1) 「作業学習」は、卒業後に地域社会（主に釧路管内）で働き、主体的に生活していく人を育てることを目標に、地域に貢献するという視点から指導計画が作成されます。これらの指導計画に基づき、地域の人材及び地域資源との連携を図りながら授業づくりを行うことで、生徒は、地域の一員であるという意識を高め、自己有用感を向上させていきます。

作業学習の授業時数は、1学年で週8時間、2学年で週9時間、3学年で週10時間実施しており、総授業時数の約3分の1を占めています。

(2) 「教科別の学習」は、実社会で必要となる基礎的な知識や技能をはじめとした、社会自立及び職業自立のために必要な力を育てることを目標に行っています。指導内容は、学習指導要領を基に3年間の指導計画である「シラバス」を作成し、系統的な学習を進めています。また、各教科等の年間指導計画を一覧にまとめ、各教科間を関連付けて、系統的な学習ができるよう工夫するとともに、単元配列や指導内容の見直しを行うなどの改善に努めています。

(3) 「セルフマネジメント」は、高等部教育課程の土台となっています。自己理解を促し、自分の目標や課題解決に向け、主体的に取り組む力を育むことをねらいとし、保健体育、自立活動、

＜連載3＞職業学科を設置する知的障がい特別支援学校高等部における特色ある取組

道徳を合わせた指導として教育課程に位置付けています。

本学習は、主に個別で学習する「じりつ」と、集団で学習する「チャレンジ」で構成され、自己理解や自己決定等の過程を大切にしています。「じりつ」では、生徒個々の課題解決に向けた学習や面談、生活の定期的な振り返りなどが行われています。「チャレンジ」では、集団で体力を高める運動に取り組むことを通して、自分の体の変化に気付き、運動する意識と運動の習慣を育成しながら自己理解を進めています。

3 環境・流通サポート科における地域の人材や地域資源を活用した特色ある作業学習

本学科は、地域の人材を活用した取組として、開校当初より、北海道ビルメンテナンス協会釧路地区協議会（以下ビルメンテナンス協会という）の方々と連携した様々な学習を展開しています。

年間30回前後、定期的に外部講師としてビルメンテナンス協会の方々と迎え、専門的な清掃技術等を指導していただいています。その取組の一つとして、毎年10月に札幌で実施されるアビリンピック北海道大会ビルクリーニング部門の競技指導があります。

このアビリンピック北海道大会に出場するために、毎年7月に選考会を兼ねた「ビルクリーニング校内技能大会」を実施し、上位入賞者を全道大会の出場者としています。

生徒は、上位に入賞することを目標に、「校内技能検定」や「ビルクリーニング校内技能大会」に向けて、作業学習に取り組んでいます。実際の授業を展開する上では、知識・技能、思考力・判断力・表現力を育てることを重視した指導に取り組んでいます。具体的な取組としては、タブレット（iPad）を活用し、自分の作業姿勢や器具・機械の使い方について、動画で振り返ることで、課題や改善点を含めた自己評価及び他者評価を行い、知識・技能の向上を図っています。



写真1 地域住民自宅の窓クリーニング



写真2 校内技能大会の様子

「ビルクリーニング校内技能大会」は、審査員としてビルメンテナンス協会の方々の協力を得ながら運営しています。ビルクリーニングの競技内容や審査基準等、事前の綿密な打合せを経て、大会時に、より専門的な目線で審査していただいています。全道大会出場者の選出後は、10月の大会まで、連日ビルメンテナンス協会の方々の専門的な指導を受け、大会に臨みます。

その結果、平成28年度の大会では、初出場にもかかわらず、金賞を受賞するという輝かしい成績を収めました。また、今年度は更に力が入り、生徒も指導を熱心に受けて臨んだ結果、出場した生徒が2名とも入賞（銀賞、銅賞）するという快挙を成し遂げ、生徒にとって、自信と誇りをもてる素晴らしい機会となりました。



写真3 ビルメンテナンス協会の方の専門的な指導

＜連載3＞職業学科を設置する知的障がい特別支援学校高等部における特色ある取組

また、地域の資源（企業や学校など）を活用した取組としては、大楽毛地区連合町内会の地域の方々の自宅や学校、企業の窓クリーニングを行っています。地域の方々とのかかわりを深めながら、学校の作業学習で身に付けた技能を、社会で実践する力に生かしています。このような実践的な活動を通して、社会貢献の喜びや達成感を味わい、自己有用感を高めていきます。また、地域企業や学校からの委託作業にも取り組み、機械の解体、積み木研磨、製本等の作業学習を取り入れ、地域貢献の意識を高める学習を行っています。



写真4 地域企業からの委託作業

4 環境・流通サポート科における作業学習の成果と課題

本学科における作業学習では、地域の人材や地域資源との連携により、生徒の学びの場が広がりました。その成果の一つとして、生徒自身が「地域で働きたい」という気持ちを抱くようになり、卒業後の社会自立へとつなげることができました。今後は、生徒の実態等を踏まえ、現在行っている「清掃」の他に題材を設定し、指導内容の充実を図っていく必要があると感じています。

5 環境・流通サポート科の卒業生の進路先

環境・流通サポート科では、初めての卒業生である第一期生10名が、この春に社会へ旅立ちました。10名のうち5名がビルメンテナンス協会加盟企業への就職が決まり、元気に働いています。その他の生徒も、水産加工会社や就労移行支援事業、就労継続支援A型事業及び就労継続支援B型事業に就労しています。

6 おわりに

今後も、本校では、学校教育目標を達成するため、地域の人材や地域資源の活用を模索し、これまでの地域とのつながりを大切にするなど、地域に根ざした学習を取り入れた授業改善に取り組みます。生徒の思い、学校の思い、地域の思いを一体化させ、更に発展させた学習を展開することにより、地域社会（釧路市内や釧根地域）で働き、主体的に生活することができる生徒の育成を目指します。

「北海道釧路鶴野支援学校Webページ」

→ <http://www.tsurunoshien.hokkaido-c.ed.jp/>



北海道の特別支援学校のスポーツ活動を支える ～一般財団法人小野寺眞悟障がい者スポーツ振興会の活動～

一般財団法人小野寺眞悟障がい者スポーツ振興会理事長 小野寺 眞 悟

1 なぜ、「小野寺眞悟スポーツ振興会」を

一般財団法人小野寺眞悟障がい者スポーツ振興会（以下「小野寺眞悟スポーツ振興会」という）の目的は、北海道の特別支援学校のスポーツ振興に関する事業を行い、障がいのある児童生徒の心身の健全な発達に寄与することです。

私は、長年、障がいのある人々の生活支援や就労支援などを行う二つの社会福祉法人（明日佳及び長沼陽風会）の理事長を務めております。毎日、障がいのある人たちと接して、就労継続支援A型事業や、それを通して一般就労した人たちの多くが、特別支援学校の部活動等でスポーツ活動に取り組んでいたことを知りました。彼らは、このスポーツ活動により、強い体、他人と仕事を円滑に進めるための協調性及び仕事を貫徹するための強い意思、意欲が養われていることに気付きました。

私は、このことから、障がいのある人たちが、地域の中で自己実現を果たすための就労生活を、より一層、円滑かつ円満に推進するためには、何よりも北海道の特別支援学校で行われるスポーツ活動を活発化して、児童生徒の心身を鍛えることが重要と考え、この「小野寺眞悟スポーツ振興会」を、平成28年7月に設立しました。

2 「小野寺眞悟スポーツ振興会」は、何を

「小野寺眞悟スポーツ振興会」は、法で定められた定款に基づいて運営しております。定款では、「小野寺眞悟スポーツ振興会」は、特別支援学校のスポーツの活発化を図るため、①フットサル等スポーツ活動の普及、②フットサル等競技会の開催・助成、③フットサル等スポーツ活動の調査・研究、④その他、必要な事業を行うこととしています。このため、平成28、29年度は以下のことを行っています。

（1）スポーツ用品を寄贈

平成28年度と29年度は、「小野寺眞悟杯フットサル大会」開催に向けて、各校でフットサル等の練習をしてもらうため、知的障がい特別支援学校を中心に、平成28年度は40校に室内用ポップアップゴール37セット、ボール157個を寄贈、平成29年度は35校に室内用ポップアップゴール39セット、ボール65個を寄贈しました。

（2）小野寺眞悟杯北海道特別支援学校フットサル大会を開催

第1回小野寺眞悟杯北海道特別支援学校フットサル大会は、平成29年7月28日、北海道青少年会館で開催しました。第1回大会は、職業学科を設置している知的障がい特別支援学校高等部を対象に、北海道の特別支援学校16校と韓国の特別支援学校2校の計18校、約150名の生徒が参加しました。本財団は、札幌市から離れた学校には、都市間バスの往復分を助成し、かつ開会式の開始に間に合わない学校及び閉会式後に各地に帰ることができない学校には、宿泊費を助成しました。韓国ではTVニュースでこの大会の様子が放送されました。

＜連載 4＞北海道の特別支援学校のスポーツ活動を支える



写真1 開会式の様子

函館五稜郭支援学校）と二川日菜さん（北海道中札内高等養護学校幕別分校）に贈られました。生徒の皆さんには今後も期待しています。

（3）エスポラーダ北海道の選手OBを各校に派遣

平成29年度は、北海道今金高等養護学校、北海道紋別高等養護学校、北海道札幌稲穂高等支援学校、北海道札幌伏見支援学校もなみ学園分校、北海道稚内養護学校及び北海道十勝管内高等支援学校3校フットサル大会（北海道中札内高等養護学校、同校幕別分校、北海道新得高等支援学校）に、社会福祉法人明日佳及び長沼陽風に勤務しているエスポラーダ北海道選手OB（吉田順省氏、笠間慎也氏、市場大資氏）を、フットサル指導員として派遣しています。各校では、自校の授業や部活動、また、地域活動で本事業を活用し、自校の生徒や教諭だけではなく、地域の人々のためにも大変有効であったと評価されています。

（4）フットサル指導者研修会を開催

平成29年3月、北海道青少年会館で寄宿舎指導員と教諭を対象としたフットサル指導研修会を開催しました。30名が参加し、北海道フットサル連盟常務理事荒川浩幸氏からフットサルルールの講義、また、本法人フットサル指導員の吉田順省氏と笠間慎也氏による実技指導が行われました。参加者からは、「学校に戻って研修の成果を還元したい」、「いつでもどこでもできるスポーツなので、寄宿舎の日中活動に取り入れたい」等の感想が聞かれました。なお、当研修会の参加者には各地からの移動費と宿泊費の助成を行いました。平成30年3月に第2回研修会の開催を予定しています。

（5）スポーツ活動に対する研究助成と研究紀要を発刊

平成29年度、北海道紋別高等養護学校は「外部指導者の活用や指導方法の工夫」、北海道稚内養護学校は「知的障がい特別支援学校でのフットサル指導の実践と可能性」、北海道中札内高等養護学校は「高等養護学校のフットサル指導における実践と工夫」をテーマに実践研究を進めております。平成30年3月、これら研究成果を収録した研究紀要を発刊するとともに、この研究成果を広げるための研究成果報告会を、上記の第2回指導者研修会と併せて、平成30年3月17日（土）、札幌市で開催する予定です。各校校長が認めた参加希望者には、移動費と宿泊費を助成する予定です。

（6）北海道八雲養護学校へのスポーツ活動を助成

北海道八雲養護学校は、主に筋ジストロフィーの児童生徒が学んでいる学校です。同校は、併設の病院に入院している卒業生と、電動車いすとスティックを用いる独自のスポーツ活動を開発していま

大会では、北海道白樺高等養護学校が優勝、準優勝は北海道高等聾学校、第3位は市立札幌豊明高等支援学校と韓国安東栄明学校でした。また優秀選手のベスト5は、若野翔太君（市立札幌豊明高等支援学校）、ヤン ドンウォン君（韓国済州特別自治道知的障がい蹴球団）、澤田偲怒君（北海道白樺高等養護学校）、ジョ ヒョンシン君（韓国安東永明学校）、中川 聖君（北海道高等聾学校）が選ばれ、フェアプレーに徹した選手を賞する小野寺眞悟賞は、山本 隼君（北海道



写真2 北海道紋別高等養護学校生徒と地域児童の交流

＜連載 4＞北海道の特別支援学校のスポーツ活動を支える

す。この開発のための助成と共に、同校には研究紀要の表紙のデザインや小野寺眞悟杯フットサル大会のポスターのデザインを通したスポーツ活動等への参画をお願いしています。

3 平成30年度の「小野寺眞悟スポーツ振興会」は

「小野寺眞悟スポーツ振興会」は、北海道特別支援学校校長会等と連携を深め、平成30年7月27日（金）、札幌市真駒内セキスイハイムアイスアリーナで、生徒と引率者の移動費及び前後宿泊費を助成して、職業学科を設置している知的障がい特別支援学校高等部及び普通科のみを設置している知的障がい特別支援学校高等部の2つのカテゴリーで「小野寺眞悟杯フットサル大会」を開催するなど、各校のスポーツ活動及び各障がい別の特別支援学校スポーツ大会活動が、より一層、活発化するよう、平成30年度事業を充実・拡充いたします。

「一般財団法人小野寺眞悟障がい者スポーツ振興会Webページ」
→ <http://onoderashingo-zaidan.or.jp/>